

忘れられないお点前

尚学館中学校2年（宮崎県）

若生 陽菜乃

今年の7月18日は、私にとって忘れられない日である。なぜなら、その日私は初めてお茶会でお点前をしたからだ。

私が茶道について学び始めたのは、小学2年生の春だった。私が通っていた小学校は小中高一貫校で、小学2年生になってから卒業するまでの間、月に2回だけ茶道の授業を受けることができたのだ。茶道を始めたばかりの私は、元々手先が器用ではないせいか、なかなかうまく基礎の所作ができなかった。特に帛紗捌きが苦手で、なかなかきれいに捌くことができずに四苦八苦していた。しかし、私が茶道のことを嫌いになることは全くなく、日本の伝統文化に触れ、学べるのが嬉しかったので、授業を楽しみにしていた。中でも私が好きだったのは、茶室の穏やかな雰囲気だった。ふすまを開ければ茶室から香る畳の匂いに気持ちが安らぎ、その日溜まった疲れが段々と薄れていくような感覚をととても気に入っていたのだ。そして、私がかつて茶道を好きになり、中学生になって茶道部に入るきっかけになった出来事が小学校3年生の時に起きた。それは、「夏の交流茶会」というお茶会に参加し、茶道部の先輩がしている盆略点前を見たことだった。その先輩のお点前は、とても美しかった。びんと伸びた背中や肘、丁寧な1つ1つの動作に、深い心遣いと気品、引きしまった雰囲気を感ぜ、「気持ちのこもったお点前」とはこんなに綺麗なもののなのかと衝撃を受けた。しばらく目を離すことができず、お茶会が終わる頃には「私もいつか茶道部に入って、あんなお点前ができるようになりたい」と強く思うようになったのだ。

そしてそれから5年が経ち、中学2年生になった私は今日も茶室のふすまを開ける。今日は何の花が咲いているのかを考え、先生に質問したりしながら和菓子を食べ、お茶を飲む。この5年間、本当に色々なことがあった。受験勉強で茶道に身が入らない時もあったし、部に新入生を必死で勧誘したこともあった。そして何より、「令和5年 夏の交流茶会」に、中学生代表のお点前役として初めて参加したのだ。その日はずっと手が震えていた。あのお点前をした先輩もこんな不安な気持ちだったのだろうか。帛紗を腰に付け、建水を持って深く息を吐く。私のお点前はまだまだ未熟だ。たまに手順を間違えてしまうし、繊細さも足りていない。でも、心をこめて、誠心誠意お茶を点てている。そんな私のお点前を見て、少しでも茶道に興味を持ってくれる人がいたならいいなと思い、茶道口で一礼して中に入る。あの日見たお点前を、私は越えられるだろうか。帛紗をたたむ。いつの間にか、綺麗にたためるようになっていた。それを見て私はあせらず、ゆっくりと成長していこうと思った。たくさんの努力を積み重ねれば、いつかは成果が見えるはずだ。私にとって茶道とは、今までの自分の成長と切り離せないものだ。だから、私はこれからも茶道を学び続け、茶道の良さを多くの人に知ってもらえるように努力すると決意し、今自分がしているこのお点前も、きっと生涯忘れられない大切なものになるだろうと思った。